

中川純男前会長の急逝を悼む

水 田 英 実

中川純男会長の訃報は、唐突な電子メールで知った。昨夜（2010年4月9日）遅くに急逝されたという内容であった。まさかという気持ちのほうが強かったけれども、そのいっぽうで、したかったことを残しているのではないのかと案じながら、ただ何通もの同内容のメールを受け取り続けていた。

前年末に南山大学で常任委員会が開催されたときが、氏と話をした最後である。その日は、会議の進め方がいつも以上にきばきとしていたように感じたので、帰りの名古屋駅までの道すがら、率直な印象としてそのことを伝えたように思う。むろん何か予感があったり議事を急いだのかといふかる気持ちがあったわけでは全くない。

個体論（中川純男ほか編『西洋思想における「個」の概念』慶応義塾大学言語文化研究所、2011年）の刊行という年来の企画も話題にした。しかし氏に実現を危ぶむふうはなかった。ただ「あれはいいのだけれども」という含みのある言い方であったから、聞き返したけれども、言葉を濁しておられたように思う。その矢先に訃報に接することになった。入院されていたことさえ知らずにいたけれども、深夜に病状が急変し、そのまま病床で奥様に見守られながら息を引き取られたということの後から聞いた。

氏との付き合いは学生時代に遡る。当時大学院生ばかりがひしめいていた山田晶先生の門を叩いた学部生は、私が最初、氏は二人目であった。学年は二つ違う。学園紛争の最中のことである。二人ともまだ院生であった頃に、何年か中世哲学会の事務局が京都大学文学部におかれていたことがあり、『中世思想研究』の編集の仕事を任されることになって、結構骨が折れる校正の作業などを一緒にやった。写本の異同をテーマに

した江藤太郎先生の論文（第 16 号所収）を、手書きの原稿から組版を繰り返して仕上げたときの苦労は、折に触れて、あれは大変だったと話が弾んだものである。いつ頃からか、話題はむしろ、学会の創設期の方々が次々と亡くなるということに及ぶようになっていた。山田晶先生も先の閏年の 2 月末日に鬼籍に入られた。しかし、よもや氏が先に逝ってしまうとは、思いも掛けないことであった。

学会の事務局が京大文学部から上智大学の中世思想研究所に移った頃には、氏は既に大阪教育大に勤めておられた。京大でも演習を担当して、アウグスティヌスの『神の国』を取り上げておられたと思う。近隣の大学図書館の書庫から借り出した貴重な古典を、片端からハード・コピーして頒布するプロジェクトが稼働していたのは、この頃であったろうか。機械可読化の趨勢にも早くから関心を持っておられた。データの公開に意欲的であった氏は、テキストの入力にとどまらず、データを効率よく加工するために機械語を操り、プログラムを自作してしまうほどの入れ込み様であったことを思い出す。

私も職を得て少し早く京都を離れていたから、その後、直接言葉を交わすのは中世哲学会の折などに限られることになった。しかし特に不都合を感じなかったのは、必ずしもコンピュータの普及に助けられたからではなかった。ヴァーチャル・リアリティなるものを、リアリティと呼ぶことに抵抗を覚えると言っていた氏と共有しえたのは、別の領域への関心である。たしかに氏の急逝の報も電子メールで届いた。しかし氏の死を事実として受け入れることは容易ではなかった。まさかと思ったのも、誤報を疑ったからではない。なぜ逝ってしまったのかと問うても、そこに答えが記されているわけではなかったからである。

アウグスティヌスをどう読むか。氏の『存在と知—アウグスティヌス研究』（創文社刊、2000 年）と題する著書は、*Knower and Known: Augustine's Philosophical Thought* という英文の表題からも推察できるように、アウグスティヌスとプロティノスの深い思想的つながりを明らかにしている。自明というだけにとどまらない仕方で、認識の現実性を説明することを課題として引き受けるなかで、自己知の内奥に分け入る試みがなされているのである。

西洋古代末期を生きたアウグスティヌスを中世哲学史の担い手として

位置づけることは、学生時代から氏が抱えていた問題であったと拝察する。古代と中世の間で、揺れていたというより、問題関心を深化させて、哲学史上の古代と中世の時代区分を見失うことなく連続させえたことによって、かえって多くの成果が生み出されるにいたったと思う。「神との対話」と特徴づけた第三巻（中川純男責任編集）を『哲学の歴史』（中央公論新社刊、2008年）の中に配したのも氏である。中世哲学会のシンポジウムにおいて、哲学史を取り上げたときに、鋭い洞察を披瀝してくれたことも記憶に新しい。しかし、いよいよこれからと思われたときに、なぜ突然逝ってしまったのか。

二人のとりとめもない話題の中で一つ思い出すことがある。氏が編集委員をする企画に加わったことは一度ならずあるけれども、筆の遅い私は原稿の締め切りがなかなか守れない。そこで言い訳でしかないけれども、肝心なのは与えられた課題・引き受けた課題を果たすのに全力を尽くすことなのだから、それを優先させたら、締め切りが二の次になるのは当然ではないかとさしむけたら、期限を守らないのは別として、期限までたっぷり時間を残して提出するのは、一種の手抜きであって怠惰の証だと思うという返事が返ってきたのを覚えている。さらに言葉を継いで、私は、だから、やるべき仕事を抱えているうちは死ぬ心配はない、もし死んで課題を果たせなかったら、それは、しなくてよかったことなのだ、というようなことまで口にした。氏は否定しなかったと思う。

氏はどうして亡くなってしまったのか。前掲の著書『存在と知』には、「ことばはことばの知を与えない」（第五章）と論じて、「知はことばが最終的に告げていることばの知として完成される」と結びながらも、「ことばの限界が信ずることを必要とするという当面の結論は、しかし、アウグスティヌスの信の理解を余すところなく表しているかどうか未だ疑問である」と書き残しているところがある。外から見ると、氏にやってほしかったこと、やりたかったに違いないことを残しているのではないかとしか思えない。学会の委員長を続けていたら、それはそれでいろいろ心労が重なったに違いないと拝察する。決定的なことは私にはわからない。しかし、いまはまだ、氏が神与の使命を果たして、為すべきことをすべて為して逝かれたに違いないことを確信しながら、ご冥福をお祈りする。